

真空管アンプ聴き比べ(2) (HP 収載)

1. 始めに

前報(1)では IPC AM1029 を 300B シングルと 45pp アンプと比較いたしました。今回、さらにこれまで FAL C90EXW で聴いたことのないサブシステム用のアンプについても聴き比べを行うことにしました。

2. アンプの接続と入力系

プリアンプ 1 機種とパワーアンプ 3 機種とプリメインアンプ 1 機種の下記の構成で試聴を行いました。IPC AM1029 は前報(1)とブリッジングのために再度使用しました。

設置場所と配線の関係からプリアンプは、今回 LEAK の Point1 に替えました。また、この実験を行うため、アンプの設置替えや接触不良の箇所の見直しを行いました。これにより、これらのアンプはサブシステム専用からメインシステムとの共有ができるようになりました。

プリアンプ： LEAK Point1

パワーアンプ 1： IPC AM1029 RCA 6L6 シングル

パワーアンプ 2： 豊中オーディオオリジナル PX25 シングル

パワーアンプ 3： Langvin RCA 6V6pp モノ×2

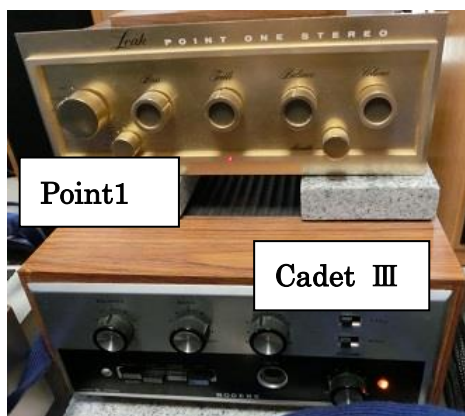
プリメインアンプ： Rogers Cadet III ECL86

スピーカーは、FAL C90EXW とし、入力系は前報(1)と同様、最近常用している下記の構成としています。

EMT981／BZT9000→CCV-5→DAC-1→TASCAM DA-3000→MYTEK DIGITAL 192-DSD

ここで EMT981 には GPS-777 から 44.1KHz、CCV-5 には GPS-777 から 96KHz、DA-3000 には ABS-7777 から 44.1KHz の外部クロック入力を行い、DA-3000 では DSF, 5.6MHz の設定で DSD 変換を行っています。

写真で見てのとおり、前報(1)と同様に、今回のアンプはいずれも超クラシックな佇まいのものばかりで、これで DSD 音源の良さや GPS クロックの効果が分かるのかと危ぶまれるようなものばかりです。



3. アンプの比較試聴結果

基本的にはクロックを効かせた DSD の音の印象は変わりませんが、やはりアンプの性格は出てくるようです。

IPC AM1029 はゲインが低いのでボリュームを上げる必要がありますが、少しまったり気味の音ながら結構音が伸びてきます。

PX25 シングルは 3 極管シングルらしい音で、300B をわずかにおっとりとして地味加減にした音ですが、ずっと以前にセピア色の音と酷評された面影はなく、適度な躍動感もあります。陰影のあるヨーロップトーンは他に代えがたいところがあります。

Langivin RCA 6V6pp は安価な 6V6 という球ながら健闘していて、すっきり感のあるトーンですが、それほど湿度感をロスすることはありません。

Rogers Cadet III は明るめのヨーロップトーンでバランスの良い音を聴かせてくれます。

いずれにしても、サブシステム用と思っていたアンプが意外にメインスピーカーの FAL をよく鳴らすようになっていました。外部クロック入力を行い DSD へのリアルタイム変換を行っていること、さらにリベラメンテシリーズのケーブルの効果の集積と思われます。

4. まとめ

前報(1)と同様、いずれもクロックを効かせた DSD の音の印象を損なうようなことはなく、その中でそれぞれの個性があることが分かりました。

そして真空管アンプは意外に柔軟性があり、DSD その他ハイレゾに対しても対応で来ているように思います。その理由はいくまで推測に過ぎませんが、F 特性はナローレンジながらもその範囲内を良好な直線性で再生でき、かつ入力信号がクロック品質やケーブルの選択で良好に維持されていれば、結果としてそれらの効果が結合音にも正確に反映されるので、あたかも F 特性の両端の域外まで伸びているように聴き取れるのではないかと思います。

以上